

アダルトチルドレンとしてのキャサリン・マンズフィールド
——「プレリュード」に見るトラウマの再体験と回復へのプロセス——

手塚 裕子*

Katherine Mansfield as One of the Adult Children
A Study of “Prelude” as a Curing Process from Trauma

Yuko TEZUKA

Abstract

Katherine Mansfield is thought to have been an adult child. Adult children are those who were raised in a family environment where alcoholism or other family dysfunctions were present. A dysfunctional family is a family in which relationships are impaired and members are unable to attain closeness and self-expression.

Katherine Mansfield clearly suffered from trauma in her childhood days in New Zealand. She was born as the third daughter in a wealthy family where the parents strongly wanted to have a son. Her parents were disappointed to know they had another daughter instead of a son. Being a sensitive child, Mansfield felt her parents' disappointment. She grew up feeling deprived of love and warmth from her parents. This was her trauma.

Mansfield's trauma is reflected in several of her New Zealand stories, such as “The Little Girl,” “Prelude,” “At the Bay,” where a little girl named Kezia is neglected and unloved by her parents. Mansfield writes her traumatic experience in those stories. She repeatedly accuses her parents of having a cruel attitude. Writing about her trauma became steps in the healing process. Mansfield slowly comes to reconcile herself with her parents. I will explore how her trauma is being cured by writing “Prelude” and other New Zealand stories in the following chapters.

Key Words: Katherine Mansfield, adult children, patriarchy, feminism

*教授 英文学

はじめに

キャサリン・マンスフィールド (Katherine Mansfield, 1888-1923), 本名キャスリーン・ビーチャムは, アダルトチルドレンである。アダルトチルドレンとは, 子供の頃に「家庭内トラウマ (心的外傷)」によって傷ついて大人になった人のことである。ニュージーランドでの子供時代を描いたマンスフィールドの自伝的作品には, 初期の作品 “The Little Girl” (1912) から晩年の代表作 “Prelude” (1918), “At the Bay” (1921) に至るまで, どの作品にもほとんど例外なく, 両親から愛されない少女が登場する。マンスフィールドは, 自分自身のことを, 家族の中の異端児, 家族の誰からも愛されない醜いアヒルの子, “the odd man out of the family – the ugly duckling”¹ だったとノートに書き記している。両親から愛されずに育った少女時代のトラウマは, マンスフィールドの生涯に決定的な影響を与えた。伝記作家のジェフリー・マイヤーズは, 「剥奪された (両親の) 愛を探し求めることは, キャサリンの生涯を支配するパターンとなった」² と, 述べている。

マンスフィールドは, 夫や親友に対して, やみくもに愛を求め, 些細な裏切りや失望に過剰に反応し, 愛と憎しみの両極端を揺れ動く人だった。それは, アダルトチルドレンに共通する特徴である。心理学者は, アダルトチルドレンの抱える「生きづらさ」を次のように述べている。「子供時代を淋しく暮らしてきたアダルトチルドレンは, 大人になっても得体の知れない寂しさに苛まれたり, 抑うつ的になったり, 不安になったりする。結婚や恋愛をしても寂しく, 家族を持ってもお孤独なことがある。そして相手から見捨てられることに過剰に敏感であったり, 自分が相手を見捨てるのに過度に鈍感であったりする。」³ この「生きづらさ」は, どんなに愛されていても孤独を感じずにいられなかったマンスフィールドの結婚生活と友人関係を的確に言い当てている。

キャサリン・マンスフィールドの生きた時代には, アダルトチルドレンという概念はなかったが, 彼女の生涯と文学を考えると, アダルトチルドレンとして過ごした子供時代のトラウマを研究することは, 大きな手がかりとなるだろう。

1. アダルトチルドレン

アダルトチルドレンという語は, 1983年に出版されたウォイティッツ (J.G. Woititz) の『アダルトチルドレン・オブ・アルコールックス』 (*Adult Children of Alcoholics*) によって, 広く社会的に認知された⁴。最初の頃のアダルトチルドレンは, アルコール依存症の親に育てられた

子供たちに限定されていたが、次第に、アダルトチルドレンの概念は広がっていき、さまざまな機能不全家族で育った子供たちを含むようになった。

キャサリン・マンズフィールドの両親は、アルコール依存症ではないし、貧困でもなく、家庭内暴力もなく、両親も不仲というわけでもない、一見したところ何の問題もなく、むしろ普通より恵まれた家庭である。マンズフィールドの父は、ニュージーランド屈指の成功したビジネスマンであり、その家庭は非常に裕福で、大きな屋敷に住み、複数の使用人を雇い、贅沢を楽しんでいた。両親は子供たちの教育のためには、お金と労力を惜しまず、子供たちが小さい時には、豊かな自然の中で育てようという配慮から、ウェリントンの屋敷を出て、海辺の町カロリへ引越し、父は毎日長い時間をかけてウェリントンの会社まで通勤した。そして娘たちが大きくなると、3人姉妹は、3年間のロンドン留学を許された。同年代の女性作家、ヴァージニア・ウルフ（Virginia Woolf, 1882-1941）が、高名な学者である父の意向で、大学進学を許されなかったことを考えると、マンズフィールドの父は、当時としては珍しいほど女子教育に理解があり、進歩的な家庭であったと言える。

それなのに何故、キャサリン・マンズフィールドは、恵まれた家庭の中で育ちながら、大きなトラウマを子供時代に受けたのだろうか。マンズフィールドの姉や妹には、このようなトラウマは見られない。伝記作家のクレア・トマリンによれば、姉のヴェラとチャディーは現実に満足できる“enough girls”であったから、子供時代についての不満を表明しなかったのではないかと⁵、述べている。同じく伝記作家のジェフリー・マイヤーズは、マンズフィールドの妹のジーンが両親について語った、次のような手紙を紹介している。「私は母をこの上なく愛していました。小柄で体が弱い母。私の両親は思いやり深く優しい人たちでした」⁶。姉妹の誰もが両親を好意的に回想している中で、唯一、キャサリン・マンズフィールドだけが、両親から愛されなかったと公言しているのは、何故なのだろうか。それは、病的なまでに神経過敏なキャサリンの被害妄想だったのだろうか。それとも、慣習と体裁に囚われた姉妹の目には見えなかった重大な欠陥を、鋭い感性をもつキャサリンが見抜いたためなのだろうか。キャサリン・マンズフィールドを研究する私は、後者の立場を取ることにする。つまり、マンズフィールドは、他の姉妹が見逃していた慣習、たとえば家庭の中の男女不平等、性差別に敏感に反応したのではないかと仮定して、以下の論を進めようと思う。

2. 愛されなかった子供時代

父権制家族では、家長である父親の次に位置するのは、長男である。妻は跡取り息子を産む

ことによって、家庭の中で揺るぎない地位を確保できる。そして子供たちの中では、長男だけが特別扱いを受け、両親の愛と期待を一身に集め、他の子供たち、特に娘たちの地位は低い。父権制の意識に染まった女性たちは、キャサリンの母や姉妹がそうであったように、長男の特別扱いを当然のことと受けとめ、長男の権威に寄り添うことで、家庭の中の地位を得ようとつとめる。しかしキャサリンだけは、そのような差別に納得できなかった。キャサリンの反抗は、ヴィクトリア朝時代の堅固な父権制度に対する、ささやかだが、本質的な異議申し立てではないだろうか。

フェミニストであり詩人のアドリエヌ・リッチ (Adrienne Rich, 1929-) は、著書『女から生まれる』(Of Woman Born, 1986)⁷の中で、長男の誕生と世襲こそ、父権制の中核であるとして、次のように述べている。

父権社会の核となっているのは、財産の概念と自分の財産が生物学上の子孫に譲渡されるのを見届けたいという願望から発生した、個々の家族という単位である。(中略) やがて人間の意識に決定的な瞬間がやってくる。女を受胎させるのは月でもなければ春の雨でも死者の精霊でもない。男自身なのだということを男が発見するときだ。女が体の中に育み、産む子供は男自身の子供で、その子供は自分が死んだときに、祈りと捧げもので神の機嫌をとることによって精神的に、また自分から家督を受け取ることによって具体的に、自分を永遠の存在とすることができると、発見するときだ。この性的な役割と財産の所有と死を超越する願望とが重なったところから、私たちが良く知っている制度、つまり現在の父権制による家族制度が発展した。(pp.84-5)

キャサリン・マンズフィールドの父、サー・ハロルド・ビーチャムは、既述したように、決して暴君ではなかったし、娘たちの教育にも理解のある優しい父であったが、長男の誕生と世襲には固執した。キャサリンの母、アニー・ビーチャムは、小柄で病弱な女性だったので、お産はどれも大変な難産だった。アニーは死ぬほどお産を恐れていたが、六回目のお産でようやく男の子を産むまで、苦しいお産を続けなければならなかった。ハロルドは妻を愛し、アニーがどれほどお産を恐れているか承知していたが、「男の子を産んでもらいたい」という父権的な望みを撤回することはなかった。アニーも夫を愛していたが、出産の恐怖から夫とのセックスも恐れていた。しかし生活のすべてを彼に依存している彼女には、夫を拒むことはできなかった。

自伝的作品、“Prelude”に登場する母親のリンダは、夜の寝室での夫とのセックスを恐らい

た。昼間の夫は、大人しくて従順なニューファンランド犬のようだった。リングは昼間の夫を愛したが、夜の夫を憎んだ。彼女にとって愛と憎しみは両方とも同じ位リアルだったが、彼女は自分の憎しみを夫に伝えることは控えた。彼女は、父権制を憎みながらも、父権制の枠組みの中でしか生きていけない自分自身を自覚していたからである。リングは、ただ、子供を産み続けるだけの自分の人生と、お金を儲け続けるだけの夫の人生を嘲笑い、「人生はなんて馬鹿馬鹿しい！」(p.255)と自嘲する。

キャサリン・マンズフィールドは、三女として1888年10月14日に生まれる。二人つづけて女の子が生まれた後で、第3子には、両親とも男子誕生を期待していた。その期待がはずれ、またも女兒が誕生した時の両親の落胆は想像するに難しくない。特に母親は、またも悪夢のような妊娠と出産を繰り返さなくてはならないのかと思うと、生まれてきた赤ん坊に罪はないとはいえ、女の赤ちゃんを可愛いとは思えなかった。そのうえ、産後の肥立が悪く、肉体的消耗も激しかったので、新生児の世話をしたのは、母方の祖母ダイアー夫人だった。

父ハロルドは、出産で消耗した妻を元気づけるため、翌1889年、半年に及ぶヨーロッパ旅行に妻を連れ出す。1才にならないキャサリンの世話は、完全に祖母に委ねられた。ハロルドとアニーの夫婦はお互いを気づかっていたが、3番目に生まれた女兒には、二人ともあまり関心をもたなかったようである。

“Prelude”の冒頭では、引越しの荷車がいっぱいになってしまったため、積み残しの荷物とともに次女と三女が置き去りにされるという、衝撃的な場面が描かれている。母にとって次女と三女は「絶対に必要なもの」“absolute necessities”ではなかったのである。同じく“Prelude”のパートVIIでは、子供部屋での席順が次のように紹介される。長女と次女が向き合って座り、三女が末席に座り、上座は空席である。その席順を見た父親は、「あそこには、いずれ坊やが座るんだな」と思うと、それだけで幸福感に満たされる。「絶対に必要なもの」ではないとして、他の不要な荷物と共に置き去りにされ、テーブルでは末席に座らされる三女の気持ちなど、両親は全く考えようもしない。長男のみが必要であり、長男が上座に座り、三女が末席に座る序列は、父権制家族の中では、当たり前のことと考えられていた。

やがて、自分があまり両親から愛されていないと感じ始めた少女キャサリン・マンズフィールドは、決定的なライバルと遭遇する。それは、キャサリンが6才の時に生まれた待望の男子、レズリー・ヘロン・ピーチャムである。跡取り息子の誕生で父は大喜びし、母はやっと出産から解放されると安堵した。家族全員から歓迎され、愛される弟に対して、キャサリンが無意識のうちに嫉妬を感じたとしても不思議ではない。少女時代のノートには、“The Grandmother”という詩が書かれている。祖母の腕に抱かれた小さな赤ちゃんの弟を見た少女は、弟を可愛い

と思うより、弟の代わりに自分が祖母の腕に抱かれたいと思い、赤ちゃんに嫉妬する。

赤ちゃんはぐっすり眠っていたが、彼の唇は、まるでキスしているように動いた。
「美しい赤ちゃんでしょう？」と、微笑みながら祖母が言った。

しかし私の唇はふるえていた。

祖母の優しい顔を見ながら、私は願った、小さな弟と代わりたいたい。

祖母の腕に首を回して、その瞳の中にある二つの涙にキスしたいと。⁸

西洋絵画の歴史の中で、最も好まれている主題の一つは、聖母子である。特にラファエロの聖母子は有名であるが、聖母子に限らず、一般的に母子象といえは、母の胸に抱かれているのは、男児であって女児ではない。ヴァージニア・ウルフの『灯台へ』(To the Lighthouse, 1928)⁹の最後の場面で、リリー・ブリスコウが書き上げた母子象は、弟ジェイムズを抱くラムゼイ夫人の絵だった。文学作品では、父と息子、母と息子のテーマは古くから語り継がれてきたが、女の子と両親の関係について語る文学作品は20世紀に入るまでほとんど見られない。絵画でも文学でも、そして実生活でも何世紀もの間、父権制家族の中で、女の子は軽んじられ、疎外されてきた。女児の気持ちは20世紀のフェミニズムが掘り起こすまで、封印され公言することは憚られてきた。しかしながら、家庭の中で特別待遇を受けている兄弟に対して、女の子たちが嫉妬していたのは間違いない。

ヴァージニア・ウルフの『歲月』(The Years, 1937)¹⁰の中で、末娘のローズは、すぐ上の兄マーチンと喧嘩ばかりしている。兄には勉強部屋が与えられ、パブリック・スクールへの進学が奨励されているのに対して、ローズは子供部屋で大人しくしているように諭されるだけである。ローズは家庭内の不平等に承服できないが、長女エレナは父権制度を疑いなく受け入れている女性なので、ローズの怒りに戸惑う。ヴィクトリア朝の上品な家庭では、男の兄弟に嫉妬することは、「女らしくない」として抑圧されていたが、誰でも心の奥底には、自分でも気づかない嫉妬や怒りを押し殺していたのではないだろうか。

家庭内の男女不平等に傷つき、生まれたばかりの小さな弟に嫉妬を覚えていた6才のマンズフィールドではあったが、学校に入学し、教師や友人と関わり、文学、芸術への興味が芽生えるにしたがって、弟への関心はうすれ、14才から3年間ロンドンに留学し、17才で一時期帰国するが、19才で再び作家を志してロンドンへ渡り、以後、二度とニュージーランドに帰ることはなく、弟との交流は、完全に途絶える。マンズフィールドと弟レズリーは、マンズフィールドの留学と6才の年齢の違いもあり、二人がいっしょに遊んで過ごした時間は非常に短く、

姉と弟の関係は希薄だった。しかし、マンズフィールドのロンドンへの旅立ちから7年後の1915年、マンズフィールド26才、レズリー20才の時、姉と弟はロンドンで再会し、レズリーは、マンズフィールドの人生に決定的な影響を与えることになる。

3. 弟との再会とその死

1914年8月、第一次世界大戦が始まると、レズリー・ヘロン・ピーチャムはニュージーランドからイギリス軍に志願し、1915年2月、イギリスに到着する。士官としての訓練を受けた後、8月下旬には、手榴弾の扱い方の訓練を受けるため、ロンドン郊外に滞在し、その間、レズリーは姉マンズフィールドが恋人のジョン・ミドルトン・マリ (John Middleton Murry, 1889-1957) と棲むロンドンのアカシア・ロードの家をしばしば訪れた。姉と別れた時、まだ13才だった少年は、今やマンズフィールドに似て文学や芸術に興味を抱く繊細な20才の青年に成長していた。父親のハロルドは、娘たちをロンドンに留学させた結果、マンズフィールドが文学にかぶれてニュージーランドを飛び出してしまったことに懲りて、大切な跡取り息子を手放すことを恐れて、絶対に留学させなかった。レズリーはオックスフォード大学への留学を希望していたが、父は留学を許さず、自分の手元においてビジネスを学ばせていた。文学的な気質をもつレズリーにとって、ロンドンで作家をしている姉は、まさに憧れの人だった。レズリーが軍隊に志願した動機の一つは、ロンドンで姉に会うことだったと言うこともできるだろう。

姉と弟は、アカシア・ロードの家の裏庭の梨の木の下や、最上階の部屋で「おそろしいほどのエクスタシーとノスタルジーに浸りながら」ニュージーランドの思い出話に熱中した。思い出を語り合ううちに、マンズフィールドはレズリーが自分と同質の感性をもっていることを発見し、日記に、「それは家族の感性 (family feeling) だと思います。私たちはまるで一人の同じ子供のようなようでした。」¹¹ と記している。自分の分身のような弟の出現は、マンズフィールドにとって新鮮な驚きだった。日記の中に描かれた姉と弟は、まるで恋人同士のようにキスをかわす。弟への感情は、“incest” を連想させるほど濃密なものだった。

レズリーが軍隊に戻った後、マンズフィールドは姉と弟の船出を主題とする幻想的な短編、“The Wind Blows” を仕上げる。この作品は、10月4日、John Middleton Murry と D.H. Lawrence の協力で作られた雑誌、*Signature* の創刊号にマチルダ・ベリーのペンネームで“Autumn” という題で発表される。この中で、主人公の少女は母親に反抗し、周囲の大人と衝突するが、家族の中の唯一の理解者である弟が登場し、最後は、姉と弟で船に乗ってニュー

ジーランドを出て行く。実際のマンスフィールドは19才の夏に単身、ロンドンへ旅立った。当時13才のレズリーは、まだ幼くて姉と行動を共にすることはできなかったが、20才のレズリーは、マンスフィールドと共に旅立つパートナーである。家族の中の厄介者、“odd-man-out”として孤立していたマンスフィールドは、思いがけない理解者を発見したのである。しかしながら、喜びに浸るのは束の間だった。わずか数週間後に、悲劇が起こったのである。

9月22日、レズリー・ヘロンは、すべての訓練を終え、フランスの戦場へと出発する。10月7日、部下に手榴弾の投げ方を指示している時、突然、爆弾の一つが暴発し、レズリーは戦死する。10月11日、レズリー戦死の訃報がロンドンのマンスフィールドのもとに届く。死の間際にレズリーが残した最後の言葉は、「ケイティー、僕の頭を持ち上げて！息ができないよ」だったと伝えられている。

レズリーの死は、マンスフィールドを打ちのめした。マンスフィールドが弟の死から受けた打撃の大きさを物語る資料として、日記の記述を幾つか引用しよう。

弟よ。私はもう長い間、自分の人生は終わりだと漠然と感じていた。しかし、弟が死んで初めて、そのことをはっきりと認識するようになった。弟はフランスの森の中に横たわっているのに、私は今も太陽や風を感じながら、背筋をのぼして歩いている。しかし、私も弟と同じように死んでいるのだ。現在も未来も、もう何の意味もない。(中略)「ケイティー、覚えている？」と問う弟の声が、木々の間から、花の香から、光の中から、闇の中から聞こえてくる。(中略)私は何故自殺しないのか？なぜなら私には弟と二人で過ごした美しい時のために果たすべき義務があると思うからだ。私は「その時」を書きたい。弟も私に書いてもらいたがっていた。私たちはロンドンの小さな最上階の私の部屋で語りあかした。「最初のページには、『私の弟、レズリー・ヘロン・ビーチャムに捧ぐ』と書くわ」と、私は言った。その通りにしよう。(1915年11月)¹²

今、私は私の生まれた国の思い出を書きたい。私は思い出を残らず書き尽くすまで、私の国について書きたい。なぜならそれが、私と弟が生まれた国に私が払うべき「聖なる負債(a sacred debt)」であるばかりでなく、私の心の中では、常に私は弟と共に思い出の場所の上を飛んでいるからだ。私の気持ちの中では、私の国から遠く離れたことは一度もない。私は書くことによって、私の国の思い出をすべて取り戻したい。そして人々―私たちが愛した人々についても書きたい。もう一つの愛の負債(debt of love)。私たちの未発見の国が旧世界の人々の目に飛び込んでくるような一瞬を私は求める。それは空中を漂うよ

うに、神秘的でなければならない。それは息を呑むようなものでなければならない。(中略)すべては、神秘のように、輝きのように、残照のように、語られなければならない。なぜなら私の小さな太陽は沈んでしまったのだから。(1916年1月)¹³

肉親の死が立ち直れないほどのダメージを与えることは稀ではない。しかしながら子供時代のキャサリンと弟との関係の希薄さを考えると、彼女のリアクションは、いささか大げさではないだろうか。最愛の祖母ダイアー夫人が亡くなった時でさえ、マンズフィールドはもっと穏やかに祖母の死を受け止めていたのに、なぜ、彼女は弟との死に対して、これほどまでに取り乱したのだろうか。

マンズフィールドの研究者、C.A.ハンキンは、*Katherine Mansfield and Her Confessional Stories*¹⁴の中で、子供時代のキャサリンは父権制家族の中で特権的地位を独り占めしている弟に対して、激しく嫉妬し、弟がいなければいいのにと密かに願っていたことから、実際に弟が死んだとき、まるで彼女の昔の願いが実現して弟が死んだように感じ、罪の意識に苦しんだのではないかと指摘している。しかし一方で、悲しみとは矛盾しているが、キャサリンは弟の死によって、恩恵を受けたのではないかと、ハンキンは述べている。

心理学的にみると、この悲劇的な数ヶ月の間、キャサリン・マンズフィールドが、成人後の人生の中で最も幸福な日々を過ごしていたことは、驚くにはあたらぬ。(中略)弟の死によって、彼女はある意味で恩恵を受けたのである。なぜならライバルは消え、父の血を引く男子はいなくなった。そして彼女は今、「世界を征服」し始めた。両親にとって、彼女は息子に取って代わる存在となり、もはや自分を「必要とされない子」として憐れむ必要ななくなったのである。(Hankin, p.111)

もちろん、無垢な弟の死によって恩恵を受けたという自覚が、彼女の罪の意識に拍車をかけたのは事実である。マンズフィールドは贖罪の気持ちから、弟を理想化し、やがて弟はマンズフィールドの心の中で、地上の恋人マリなど足元にも及ばない、「至高の恋人」へと昇華していく。弟の死を悲しむマンズフィールドを目の前にして、マリは、自分の存在が完全に彼女の心から閉め出されていると感じていた。マリは自伝、*Between Two Worlds*の中で、当時を回想して、次のように述べている。「キャサリンの弟の死は、私たちの間に影を投げかけた」、「弟は死んでいるのだが、彼女にとっては、現実の私より彼の方が、ずっとリアルな存在だった」、「今まで、私自身に対しても、キャサリンに対しても告白できなかったが、その時の感情は、

明らかに嫉妬だった」¹⁵。今まで、マンスフィールドの男性関係について、ほとんど嫉妬したことがないマリが、初めて、死んだ弟に嫉妬したのである。

視点を変えてみれば、マリに嫉妬させることが、キャサリンの目的の一つであったのかもしれない。マリに対する不満から彼へのあてつけとして、死んだ弟を理想の恋人にしたと考えることもできる。キャサリンやマリと親しく交際していたD.H. ロレンスの妻、フリーダは、「この弟というのは、キャサリンの満たされない愛情を補完するシンボルだったと思います。つまりマリが決してなってくれなかった、(理想的な) 恋人のイメージを彼女は弟の思い出から創りあげたのでしょう」¹⁶と、述べている。

当時、マリとキャサリンは、まだ彼女の前夫との離婚が成立していなかったため、同棲中の恋人同士だった。二人は、1911年末、出会ってすぐ恋に落ち、二人で雑誌、*Rhythm* を編集し、「文壇の二頭の虎」として活躍した。そして3年間の蜜月時代を過ごした後、次第に雑誌の経営状態が悪化し、まもなく雑誌は廃刊となり、二人の恋も最初の情熱が冷め、倦怠期に陥ってしまった。キャサリンは新しい恋を求めて、フランシス・カルコと逢引するために戦時下のパリに冒険旅行したが、カルコにも幻滅して、仕方なくロンドンのマリの元に戻って来た。弟が現れたのは、まさにこのような恋人同士の危機的状況の中だった。

キャサリン・マンスフィールドが好む男性のタイプは、D.H. ロレンスのような男らしさを押し付けてくるような男ではなく、優しく繊細な男性だった。マリは自分自身も認めるとおり、「男らしさ」の少ない男性だった。マリとの蜜月時代に書かれた作品、“*Something Childish but Very Natural*”には、少年と少女の無垢な愛が描かれているが、それがマンスフィールドが理想とする恋愛の形だった。マンスフィールドより2才年下のマリは、最初から「弟」のような恋人だった。擬似的な弟、マリに失望したマンスフィールドの目の前に現れた、肉親の弟、しかも死によって美化された弟は、理想的な想像上の恋人となったのである。

弟は、兄ではないのでキャサリンを支配しようとせず、むしろ作家として活躍する姉に憧れ、姉を尊敬し、姉の話に耳を傾ける良き聞き手であった。レズリー・ヘロンは裕福なビーチャム家の長男として豊かな経済力をもっているため、キャサリンがカルコと逢引するためにパリに行くときには、旅行費用として姉キャサリンに充分なお金を提供してくれた。またレズリーは優しいだけでなく、イギリスを守るために戦う勇敢な兵士でもあった。彼は、優しく繊細で、良き理解者、良き聞き手、良きサポーターであり、しかも経済力があり、いざという時には、兵士となって戦う強い男である。それは、まるで男らしさと女らしさの両方の美点を併せもつ理想的な男である。21世紀の今日においても、理想とされるような男性である。赤ちゃん時代のレズリーは、家庭内で女の子を抑圧する父権制のシンボルとして、キャサリンから嫉妬さ

れたが、死後のレズリーは、19世紀的な父権制を超克する新しい理想の男性のシンボルとして、キャサリンの愛を独占することになる。

弟の死を追悼するため、キャサリンは弟の挽歌として、ニュージーランドで過ごした子供時代の物語を書き始める。最初、“The Aloe”と名づけられた作品は、のちに“Prelude”と改名して、1918年7月、ヴァージニア・ウルフ夫妻のホガス・プレスから出版される。“Prelude”は、キャサリン・マンスフィールドの代表作となり、文体、表現、内容において、それまでの古い文学作品の常識を破り、新しいモダニズムの前衛的作品として高い評価を受ける。しかし、奇妙なことに、弟の挽歌であるはずの“Prelude”には、弟はまだ生まれていないので登場しない。弟について書くということは、赤ちゃんの弟に嫉妬していた過去の自分と向き合うことでもあるから、マンスフィールドは弟に嫉妬した理由から書き始めようとしたのである。弟への嫉妬は、長男誕生を待ちわびる両親が、三番目の女の子であるキャサリンを愛さなかったという過去の外傷体験に起因している。“Prelude”は、マンスフィールドをアダルトチルドレンにした過去の悲惨な体験、すなわち、カロリへの引越しの時の置き去り事件から始まる。女の子であるという理由で愛さなかった両親を告発し、過去のトラウマを書くことは、しかしながら結果的には、アダルトチルドレンとしてのマンスフィールドの心の傷を癒す回復への作業となった。

4. “Prelude”：トラウマの再体験と回復へのステップ

心理学者、ウェイン・クリッツバーグの『アダルトチルドレン・シンドローム：自己発見と回復のためのステップ』¹⁷によれば、アダルトチルドレンの治療方法には、家族統合法（FIS-Family Integration System）がよく用いられる。FISは、原家族（自分の育った家族）にまつわる未解決の問題を解決するために、自分の子供時代の記憶と向き合うことから始まる。

目的は、失われた子供時代の記憶を取り戻すことと、そうした記憶にしばしば付随する心的外傷を癒すことである。実際の出来事を思い出せばその記憶とともに抑圧されていた情動を処理する機会が得られる。こうした記憶や情動を処理することは非常に重要である。なぜなら、衝撃的な出来事というのは、たとえ当事者の記憶に残っていなかったとしても、いつまでもその人の心と体をむしばみ続けるからだ。トラウマにまつわる情動を解消しない限り、その人は、一生涯その影響をこうむり続けるのである。（クリッツバーグ、p.137）

愛されなかった子供時代を過ごしたアダルトチルドレンは、トラウマの中核となった実際の出来事を記憶から消して封印しているケースが多い。なぜなら、その出来事を思い出せば、その時の恐怖や悲しみがよみがえって、耐え難い苦痛を与えるので、身を守るために自分の記憶を抑圧する。しかし、トラウマを封印したままでは、いつまでもトラウマから解放されない。アダルトチルドレンから回復するためには、もう一度、トラウマとなった衝撃的事件を再体験する必要がある。

原発トラウマ時の感情を再体験し、長い間、抑圧し封印してきた深く激しい感情を解き放つことによって自由と開放感を味わい、やがて抑圧されていた衝撃的事件は本人に対する力を失い、本人の中に統合される。すなわち、それはその人の生活体験の単なる一部となり、くよくよ思い悩むことでも無視することでもなくなるのである。

(クリッツバーグ, p.90)

家族統合法 (FIS) を成功させるために、最も重要なことは、アダルトチルドレンが自分のトラウマ体験を語れるような「治療的環境」を作り上げることである。安全な環境の鍵となるのは、セラピストとの信頼関係である。「恐怖や怒り、痛み、恥などを表出しても自分を拒否しないという信頼」(クリッツバーグ, p.88) を、セラピストとの間に確立することが不可欠である。

キャサリン・マンスフィールドにとってのセラピストは、成人後に再会した弟だった。少女時代、家族の中で孤立し、心を閉ざしていたキャサリンは、成人した弟と再会して初めて、ニュージーランドの思い出を語り合える理解者を発見する。弟の死は打撃ではあったが、弟に捧げる挽歌、“Prelude”を書くことは、弟との対話を続けることだった。

“Prelude”の冒頭は、マンスフィールドにとっての原発トラウマ体験の引越しの場面から始まる。マンスフィールドが4才の時、一家はウェリントンから自然の豊かな海辺の町カロリへと引越す。荷物が予想より多く、一度に荷馬車に全部積みきれないことがわかった時、母親のリンダは迷うことなく、次女ロッチェと三女キザイアを置いていくことに決める。長女イザベルと「絶対に必要で一瞬たりとも目を離せない荷物」だけを積み、次女と三女はテーブルや椅子と一緒に置き去りにされたのである。

いくら夕方に、もう一度馬車が迎えに来るまでの数時間のこととはいえ、4才の女の子が6才の姉とともに、空っぽの家の前で家具といっしょに置き去りにされるというのは、衝撃的な事件である。実際に置き去りにされただけでなく、「絶対に必要なもの」しか持っていけない

という母親の言葉から、「あなたは必要でない」というメッセージを読み取って、さらに深く傷ついたのである。それは、典型的な「見捨てられ体験」である。クリツバークは、「アダルトチルドレンには必ず多かれ少なかれ情緒的見捨てられ体験がある」(p.48)と述べている。

「見捨てられた」という感覚は子供を恐怖のどん底に突き落とす。(中略)子供は一人では生きていけないことを知っている。親がいなくなってしまうと戻ってこないという恐怖を言葉で言い表すことはできないかもしれないが、その恐怖は確実に存在するのである。見捨てられたとき、子供は原初的な恐怖を体験する。それは、生き残れないかもしれないという恐怖—死の恐怖—である。(p.49)

クリツバークによれば、治療的環境が整いセラピストと信頼関係を築き、抑圧してきた感情を語り始めたアダルトチルドレンは、原発トラウマ時の感情を再体験し、抑圧してきた深い激しい感情を放出する作業を続けるうちに、次第に心が軽くなり、開放感を得られるようになり、最終段階であるトラウマの解消・統合に至るとというのが、アダルトチルドレンの回復のプロセスである。キャサリン・マンスフィールドも“Prelude”を書くことによって、トラウマの再体験→感情の放出→開放感→解消・統合へと、回復のプロセスを歩んで行ったのではないだろうか。“Prelude”の冒頭で、トラウマ体験を語った後、パートIVでは、マンスフィールドの全作品の中では、ほとんど唯一といってよいほど珍しく、母と娘のコミュニケーションが成立する場面が描かれる。娘キザイアが母からアロエについて教えてもらう場面である。

「おかあさん、それは何？」とキザイアが尋ねた。

「それはアロエよ、キザイア」と彼女の母は言った。

「アロエの花は咲くの？」

「そうよキザイア、100年に一度だけね」とリンダは半分目を閉じて、娘に微笑んだ。

(p.240)

この場面では、他のどの作品でも、滅多に娘に笑顔を見せない母が、珍しく娘に微笑む。絶え間なく出産の苦しみに喘ぐリンダにとって、100年に一度しか生殖しないアロエは、救済のシンボルである。リンダはアロエに託して、幼い娘、キザイアに、出産から解放された生き方があることを示唆する。それが母から娘へのメッセージであった。そして、パートXIで、リンダはアロエの葉の形から船を連想し、その船に乗って夫や子供たちのいる家庭から逃走する

夢をみる。

アロエに関するこれら二つの場面、母の微笑みと母の逃走の夢を描いたマンスフィールドは、もはや母の冷たさを批判し、母を責めるだけの娘ではない。マンスフィールドは、一人の成人した女性として、母の苦悩と母の夢を理解し、共感したのである。経済力のない母は、父権制家族の外で生きることはできなかったが、母がどれほど出産を恐れていたか、母がどれほど家庭の外の自由な世界に憧れていたか、娘のマンスフィールドはわかっていたのである。母の無念は、父権制家族制度の中で抑圧された生き方を強いられた女性の喘ぎである。“Prelude”の中には、何の疑いもなく、多くの子供を産み育てる、母性的なサミュエル・ジョゼフ夫人も登場する。しかし、マンスフィールドは、母性的なジョゼフ夫人ではなく、母性を疑い、子供を愛せない自分を責めるリンダに共感を寄せる。

“Prelude”の出版から3年後、1921年7月に、マンスフィールドは転地療養先のスイスのモンタナで、“Prelude”の続編として、“At the Bay”を書く。“At the Bay”では、やっと弟レズリー・ヘロンが生まれ、赤ちゃんとして登場する。この作品の中では、リンダは母性に対する疑問をさらに内面化させる。女が子を産むのは当たり前と思われているが、リンダはその常識に疑いを投げかける。彼女は出産によって、自分が破壊され、弱められ、勇気をくじかれたと告白する。リンダの告白は、マンスフィールドが母と共感して、想像して書き上げた告白である。マンスフィールドは、娘を愛さなかった母を責めるところから一歩前に進んで、父権制家族制度の下で抑圧された女性の無念を理解するのである。

5. “The Fly”：父との和解

同様に父親に対しても、キャサリン・マンスフィールドは、父を家族の上に君臨する家父長としてではなく、一人の人間として見た時、父の挫折、父の苦悩に共感し、父を理解する。マンスフィールドは、1922年2月、結核のエックス線治療のためバリーに滞在した時に、“The Fly”を書く。それは、マンスフィールドの死の約1年前のことである。

“The Fly”の主人公ボスは、マンスフィールドの父ハロルドと同様、成功したビジネスマンとして幾つかの会社を経営しているが、6年前、第一次世界大戦で跡取り息子を亡くしている。息子はフランスの戦没者墓地に埋葬されているが、ボスはまだ一度も息子の墓参りをしたことがない。彼はまだ、息子の死を受け入れることができないからである。或るとき、ボスのところへ退職した元の部下、ウッディフィールド氏が訪れる。彼との安全な会話の中から突然、息子の墓の話が飛び出し、ボスは激しく動揺する。ウッディフィールド氏も戦争で息子を亡くし

ていた。先日、ウッディフィールド氏の娘たちがフランスに行き、戦死した息子の墓参りをした時に、偶然、ボスの息子の墓を見てきたと言うのである。ウッディフィールド氏は、もう6年も前のことなので、心の整理もつき、美しく花で飾られた息子の墓に満足していたが、ボスは違った。ボスの悲しみは、まだ少しも癒されていなかった。ウッディフィールド氏の言葉は、ボスの心の傷にさらに深い一撃を与えた。

たぶん他の男なら息子の死から立ち直って、乗り越えて生きていけるだろう。しかし彼にはできない。どうしてできるだろう？彼の一人息子を失って。息子が生まれて以来、ずっと彼は息子のために事業を拡大してきた。もし息がいなくなったら、何の意味もなくなる。人生そのものが無意味になる。息子が彼の跡を継ぎ、彼の死んだ跡も事業を継続してくれるという望みがないなら、どうしてこの長い年月の間、奴隷のように働くことができたのだろうか。そしてその望みはもうすぐ実現するところだった。息子は戦争に行く前の年からオフィスで彼の仕事を手伝っていた。(中略)しかしすべては終わった。あたかも最初から存在しなかったかのように。あの日、メイシーがああ電報を持ってきた日に。あの電報は彼の頭上で全世界を粉々に打ち砕いたのだった。(p.532)

父権制の中核である「長男による世襲」の望みは、息子の戦死によって打ち砕かれる。妻が六回の苦しいお産の末にやっと産んでくれた長男、娘の存在を無視してまでも手に入れたかった長男は、父権制国家が始めた戦争に志願して戦死し、彼の夢は消えてしまった。

作品のタイトル、“The Fly”は、ボスが気まぐれから蠅を殺してしまうエピソードから来ている。ボスは、悲しみに浸りながら、ふとインク壺に目をやると、壺の中に蠅が落ちているのを見つける。ボスは、その蠅を助け出し、吸い取り紙の上に置いてやると、蠅は死に物狂いで力をふりしぼって羽や両足をこすり合わせて水分を落とし、体を乾かす。その逞しい生命力に感動したボスは、もう一度その回復のプロセスを見たくて、わざと蠅の上にインクの滴を落とす。次も蠅は、強靱な努力で体を乾かす。何度か繰り返すうちに、とうとうその蠅は力尽きて死んでしまう。

蠅とボスの関係は、ボスと神の関係の縮図である。神は、息子の死の打撃から死に物狂いで立ち直ろうとしているボスに、気まぐれから何度も打撃を加え、ボスの立ち直りを見て満足するが、何度も繰り返すうちにやがて神はボスを罵り殺してしまうだろうという哀れな運命を暗示している。これは、シェイクスピアの『リア王』の次の一節から影響を受けている¹⁸。

私たちと神々の関係は、蠅といたずら小僧に似ている。

いたずら小僧が気まぐれに蠅を殺すように、神々は私たちを殺す。(4幕1場36-7行)

娘キャサリンを、女の子であるという理由で軽視し、男の子を産むまで妻に苦しいお産を強制した父もまた、神にとっては、蠅も同然である。神は、個々の家父長の上に君臨する父なる神である。父ハロルドもまた、より大きな父(=神)の支配する父権制の犠牲者にすぎない。父を抑圧者ではなく、父もまた父権制の犠牲者として見た時、キャサリンは父の苦悩と挫折を理解するのである。

おわりに

子供時代のトラウマを作品の中で語ることによって、トラウマを再体験し、トラウマを癒し、両親を理解し、アダルトチルドレンから回復していったキャサリン・マンスフィールドは、“The Fly”執筆から2ヵ月後、1921年3月1日に、親友のドロシー・ブレットに宛てて、次のような手紙を書く。¹⁹

あなたの両親をあまり責めてはいけません！ 私たちには、皆、両親がいます。両親の影響から逃れる唯一の方法は、自分自身に与えた影響力をよく調べること、自分自身の心を調べ、どのような影響を受けたのかを完全に知ることです。それは役に立ちます。自分自身の長所や短所について、誰かを責めたり、誰かを賞賛しているうちは、人は決して自由になれません。そう思いませんか？ つまり私たちは、離島に住んでいるわけではないのです。そうではなくて、人生は人間関係です。与えたり、与えられたり—しかし、それは他人に責任をとらせることではないのです。そこに危険が潜んでいます。私が両親の強大な影響力を過小評価していると思わないで下さい。そうではありません。両親の影響は巨大で圧倒的です。私たちがまだテーブルの高さと同じくらいの身長しかなかった頃、両親は本当に巨人でした。しかし人生における他のすべての事柄と同様、どんなに大きな苦しみでも、私たちは乗り越えていけるのです。(p.186)

キャサリンの言葉は、ウォイティッツが治療のプロセスを示唆するために、アダルトチルドレンである患者に語った次の言葉とよく似ている。

過去に生きることや親を責めることは、現在に生きることや自分の行動に責任を持つことを回避する手段となりうるからだ。いつまでもそれをやっていると、そこから一歩も前進できなくなってしまう。(中略) 他者の行為から回復するためには、他者の行為に対する自分の反応を変える必要があり、それは過去にではなく現在に焦点を合わせることによってもっとも効果的に対処できるからだ。あなたが子供時代に内面化したものは、現在のあなたの人格あるいは自我感情の一部になってしまっている。だから、それを換えられるのはあなた以外に誰もいない。(中略) 絶え間ない苦しみの中でひたすら親の非を責めてばかりいても、そこから抜け出すこともそれを乗り越えることもできないのはそのためだ。現在のあなたの困難はあなたの問題なのだ。自分の外側に焦点を合わせることは自分の回復を遅らせることにしかない。(ウオイティッツ, p.191)

ウオイティッツは、回復のプロセスを経るということは「今まで一度も味わったことのない自由を獲得するということ」(p.193)とであり、アダルトチルドレンからの最終的な回復は、「子供時代にもつこのできなかった子供の心を持つこと」(p.193)と述べている。

キャサリン・マンズフィールドがニュージーランドで過ごした子供時代を描いた数々の作品が、今も読む人の心を打つのは、そこには、アダルトチルドレンとしてのトラウマを乗り越え、「子供時代にもつこのできなかった子供の心」が十分に表現されているからではないだろうか。私たちが小さな子供だった頃、両親は神に匹敵するような万能の存在だった。しかし神ではない両親には、様々な欠点がある。両親の気まぐれや、思いやりのない言動が幼い子供の心を傷つけ、トラウマになることは、決して珍しいことではない。誰もが、両親との間に何らかの葛藤をもち、誰もが多かれ少なかれ、アダルトチルドレンなのである。だから、アダルトチルドレンからの回復は、私たちにとって、生きていく上で最も重要なテーマの一つなのではないだろうか。(2009年10月)

テキスト

The Stories of Katherine Mansfield, Ed. Antony Alpers, Oxford University Press, 1984. 本文中の引用は、特に断らない限り、筆者が試訳した。

註

- 1 *The Katherine Mansfield Notebooks, Vol.1*, Ed. Margaret Scott, Lincoln University Press, 1997, p.49.
- 2 Meyers, J. *Katherine Mansfield: A Biography*, A New Directions Book, 1978, p.5.
- 3 緒方明, 『アダルトチルドレンと共依存』, 誠信書房, 1996, p.24.
- 4 J.G. ウォイティッツ, 齋藤学監訳, 『アダルトチルドレンーアルコール問題家族で育った子供たち』, 金剛出版, 1997.
- 5 Tomalin, C. *Katherine Mansfield: A Secret Life*, Alfred A. Knopf, 1988, p.14.
- 6 Meyers, p.6.
- 7 アドリエンヌ・リッチ, 高橋芽香子訳, 『女から生まれる』, 晶文社, 1990, pp.84-5.
- 8 *The Katherine Mansfield Notebooks, Vol.1*, p.235.
- 9 Woolf, V. *To the Lighthouse*, 1927, rpt. Hogarth Press, 1990.
- 10 Woolf, V. *The Years*, 1937, rpt. Hogarth Press, 1990.
- 11 *Journal of Katherine Mansfield*, Ed. John Middleton Murry, Constable, 1954, p.84.
- 12 *Ibid*, p.84..
- 13 *Ibid*, p.93-4.
- 14 Hankin, C.A. *Katherine Mansfield And Her Confessional Stories*, St. Martin's Press, 1983.
- 15 Murry, J.M. *Between Two Worlds*, Julian Messner, 1927.
- 16 Hankin, p.106.
- 17 ウェイン・クリッツバーグ, 齋藤学監訳, 『アダルトチルドレン・シンドローム：自己発見と回復のためのステップ』, 金剛出版, 1988.
- 18 Shakespeare, W. *King Lear*, 1623, rpt. Methuen, 1927.
- 19 *The Collected Letters of Katherine Mansfield, Vol.4*, Ed. Vincent O'Sullivan & Margaret Scott, Clarendon Press, 1996.